

「佐渡の伝統風景」～宿根木の街並み～ 新潟県佐渡市

宿根木は、中世のころ（江戸時代より前まで）には、佐渡地頭の筆頭格である本間氏の支配下にあった。海岸段丘上に垣の内という小集落を構え有力農民が住み、宿根木集落の中心となる谷内には、漁業に関わる「浦」が形づくられていたと思われる。

江戸時代の中期、「浦」の比重が飛躍的に大きくなり、わずか1haほどの谷内に農業を営む長百姓、千石船の船主、船乗り、船大工が混在し、街道に依存しない商港町をつくりあげた。そして、文化・文政期（1804～1829）の頃を頂点とし、船大工の村、回船持ちの村として栄え、「佐渡の富の三分の一を集めた」と言われた。かつては120戸余りの家があり賑わいを見せていたが、現在では70戸ほどになっている。

宿根木集落は、都市的な機能を持つ特徴的な住環境をつくりあげている。集落の東西は海岸段丘が迫り、南に海を望む地形で、北からは称光寺川が海へ注ぎ、上流には神社、寺が立地しており、集落の中を通る石畳の「世捨て小路」と呼ばれる小道は、一見迷路のようなが、一定の法則を持ちすべてが海に通じている。神社に神を奉り、寺、川、公会堂、大浜、小路と谷内の町並みは、それ全体が一軒の家のようにもみえるのである。神社は海人の信仰が厚い「白山神社」を村の鎮守に奉り、人々に積極的に布教した時宗「称光寺」の寺を建て、村人全てがその檀家におさまっている。

宿根木海岸は、佐渡弥彦米山国定公園並びに天然記念物及び名勝佐渡小木海岸に含まれており、入り江の両側には、佐渡市の文化財「船つなぎ石」を見ることができる。江戸時代、回船を持って北海道や瀬戸内海に乗り出し、商売から帰った船を繋いだもので、現在7本残っている。

平成3年4月「宿根木地区」は重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。



宿根木の住居

みどころ



- 佐渡国小木民俗博物館の千石船展示館には、安政5年（1858）に宿根木で建造された「幸栄丸」を当時の板図（設計図）をもとに忠実に実物大に復元し、地元の白山神社にちなんで「白山丸」と名付けた千石船を展示している。

全長23.75m 最大幅7.24m 積石数512石積 帆の大きさ155畳